

扉を開けるピンソン (2)

Tituli paginam Pynson aperit (2)

高野 彰

Akira TAKANO

Summa

Pynson exhibebat pictulam super alba pagina et utebar eandem pictulam super continuis duo albis paginis auto eandem super pro aut pone alba pagina libri. Habetne in usu pictulam supplere sententiam sed exhibebat pictulam complere paginam. Quod sententiae paginam, tituli paginam et albam paginam complet, complet omnia paginas. de Worde etiam complet omnia paginas. Quod duo magni typographi, Pynson et de Worde adoptant “complere paginam” principium, erat principium commune non tantum iis sed etiam omnibus Britannicis typographis in primo saeculi XVI.

8. 巻末付近の白ページ

「ページいっぱいの表示」とは本来本文ページの表示原則である。これをピンソンが扉表示に適用したとなると、本文以外のページの表示方法が気になってくる。はたしてこの原則はすべてのページの表示原則だったのであろうか。

本文は巻頭から巻末に向けて順番に活字組みをしていく。しかしこの作業を繰り返したからと言って、巻末が「ページいっぱいの表示」になるとは限らない。巻末の多用な姿は表8-1で「後」という項に示した通りである。この表で使用している C1、G1 といった略号を説明すると表8-2になる。

なお、表8-2の表示形はド・ウォードの場合と同じなので、例図はそちらを参照していただきたい⁽¹⁾。

表8-2から分かるように、巻末付近の表示形は C、G、H、P、R、S の6種類である。C形には4種類 (C1、C2、C3、C4) あるが、C1では最終活字ページの文章がページの途中で完了しているために、下部の余白には絵が添えられている。C2では最終活字ページが全部文字で埋められている。そしてC3では最終活字ページの下部余白に奥付が図柄表示されている。従ってこの3表

表 8-2 : 「表 8-1」 の記号の説明

表示形	最終4ページ前	最終3ページ前	最終2ページ前	最終1ページ前	最終ページ	
C	1				A (絵)	
	2				A (F)	
	3				A (▽)	
	4				A (余白)	
G	1			A (絵)	絵	
	2			A (F)	絵	
	3			A (▽)	絵	
	4			A (余白)	絵	
H	1			A (絵)	白	
	2			A (F)	白	
	3			A (▽)	白	
	4			A (余白)	白	
P	1		A (絵)	絵	絵	
	2		A (F)	絵	絵	
	3		A (F)	白	絵	
	4		A (▽)	絵	絵	
	5		A (▽)	白	絵	
	6		A (余白)	絵	絵	
	7		A (余白)	白	絵	
R	1	A (絵)	絵	絵	絵	
	2	A (▽)	白	文	絵	
	3	A (▽)	白	文	A (余白)	
	4	A (余白)	白	白	A (絵)	
	5	A (余白)	絵	白	白	
S	1	A (F)	白	白	白	絵

A : 最終活字ページ
 絵 : 木版画、木版書名、印刷者マーク
 F : 最終活字ページは最終行まで活字印刷
 ▽ : 印刷ページの下部の奥付が図柄表示されている
 余白 : 最終活字ページの下部は余白のまま
 白 : 白ページ

示形は最終活字ページがいずれも「ページいっぱいに表示」されていることになる。

しかし C4 では下部の余白が白のまま、埋められていない。C 形の 4 種類 (C1、C2、C3、C4) の使用件数は、表 8-3 によると、それぞれ 37、24、32、12 である。C4 は 12 件なので、例外とは言えない件数であるが、C 形の中で最も少ない使用件数である。C 形は原則として「ページいっぱいの表示」を目指していたと見てよい。

表 8-3 : 巻末の表示形の使用件数

表示形	C1	C2	C3	C4	G1	G2	G3	G4	H1	H2	H3	H4	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	R1	R2	R3	R4	R5	S1
件数	37	24	32	12	1	35	23	29	2	5	7	5	0	1	5	2	9	2	7	0	1	1	1	2	1

G 形も 4 種類 (G1、G2、G3、G4) である。G1、G2、G3 の最終活字ページは C 形の最終活字ページのそれと同じである。加えて次のページ (最終折丁の最終ページ) には絵が印刷されてい

る。絵の果たす「ページいっぱいの表示」機能はどのページであっても変わらないので、G1、G2、G3の巻末はどれも「ページいっぱいに表示」されていることになる。

他方、G4の最終活字ページの下部は余白のままであるが、G1、G2、G3、G4の使用件数は、表8-3によると、1、35、23、29なので、G4は2番目に多い。G4は意識して使用されたと見てよい。G4も最終ページに絵が示されているので、これを持って巻末付近のページはすべて印刷されたとみなし、途中の余白を無視しようとしたのではないだろうか。基本的には全てのページを「ページいっぱいの表示」にするが、時には巻末の折丁の最終ページを「ページいっぱいに表示」することで、中間の余白は無視するという「手抜き思想」である。

手抜き思想がどのように活用されたかは余白の埋め方を見ればよくわかる。G形の最終活字ページの下部にできる余白をどのように処理するかによって、余白を全く埋めないG4、奥付を図柄表示にしたG3、わざわざ絵を用意したG1に分けられる。これらの内でどの作業が楽かは30点(G4)、23点(G3)、1点(G1)という使用件数を比べれば明白である。G4形が最大の使用件数なので、手抜き思想が存在し、積極的に実行されていることは明らかである。しかしこの手抜き思想は余白や白ページが中間にある場合に限定して活用され、全ての表示形に適用されるわけではない。C形に手抜き表示がないのはそのためである。

H形も4種類(H1、H2、H3、H4)であるが、G形と違い、最終ページの様子が不明のため、白ページにしてある。H形の4種類は、表8-3によると、2、5、7、5と件数は少ない。H形はG形の例外と言えよう。

9. 巻末の2白ページ (P形)

P形は巻末に2白ページができるため、表示形は7種類と多様化する。しかしピンソンはP1を使用していないので、実際には6種類(P2、P3、P4、P5、P6、P7)になる。P形の最終活字ページもC形のそれと同じである。そして2白ページの内の2ページ目(最終折丁の最終ページ)には必ず絵が添えられている。従ってP形も、G形と同様に「ページいっぱいの表示」になっている。

P形を最終活字ページの様子で分けると、表8-2から分かるように、「P2とP3」、「P4とP5」、「P6とP7」に3区分出来る。P2とP3とは中間の白ページが埋められているかいないかの違いである。両者の使用件数は1件(P2)と5件(P3)なので、埋めていないP3形の方が多い。P4(2件)とP5(9件)でもやはり埋めていないP5形が多用されている。

P6とP7はいずれも最終活字ページの下部に大きな余白が残っているが、P7はそれに加えて、次のページも白である。両者の使用件数は2件(P6)と7件(P7)なので、二重に白のあるP7が多用されている。余白や白ページのままでも済ませられるのであればその形を優先しているのだから、ピンソンはP形も「ページいっぱいの表示」をすると共に、手抜き表示を採用していたことになる。

10. 3白ページ (R形)

R形は巻末に3白ページができる表示形である。これには5種類 (R1、R2、R3、R4、R5) あるが、R1は未使用のため、4種類である。そしてR形はR5 (2件) を除くといずれも1件しか見かけない。表示の様子は表10-1に示したとおりである。

表10-1：R形

	最終活字ページ	白ページ1	白ページ2	白ページ3
R2	C3形	白	正誤表	絵
R3	C3形	白	活字ページ	活字と余白
R4	C4形	白	白	奥付と絵
R5	C4形	絵(木版)	白	白

11. 4白ページ (S形)

S形はS1の1種類で、1点しかない。この形では白ページが4ページもある。内訳は最終活字ページが「ページいっぱい表示」になっているが、続く3ページは全部白ページのままで、最後のページには印刷者マークが示されている。手抜き表示の典型であり、S形も「ページいっぱい表示」をしていることが分かる。

12. 巻末の絵

巻末の白ページを埋めるために大きな役割を果たしたのが「絵」であるが、それにはどんな種類の絵が使われたのだろうか。

表12-1は巻末で使用された絵の種類を示している。表によると、絵の大半が印刷者マークであり、147点に及ぶ。それに対して木版は11点にすぎない。印刷者マークとは印刷者の名前やそれを暗示する絵であるから、このマークは宣伝目的で考案された工夫と言える。しかもピンソンはこのマークを多用したことから、巻末の余白は宣伝目的に活用されたことが考えられる。はたしてそうだろうか。

印刷者マークが巻末で多用されたことは確かだが、他方で、巻末に絵を使っていない場合が86件もあり、この件数は総件数(244件)の1/3にもなる。表示形で言えばC2、C3、C4、H2、H3、H4である。もしマークを宣伝目的で使用するのであれば、これらの表示形にもマークを表示する必要がある。しかしC2は巻末が「ページいっぱい表示」のため、絵を示す余地はない。巻末に表示スペースがなければ、巻頭付近での表示が考えられるが、C2形24件の内、巻頭付近でマ

表 12-1：巻末の絵の種類

表示形		C1	C2	C3	C4	G1	G2	G3	G4	H1	H2	H3	H4	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	R2	R3	R4	R5	S1	計
巻末	絵	マーク	34			1	32	20	29	2					1	5	2	8	2	6	1		1	2	1	147
		木版	3				3	3										1		1						11
		なし		24	32	12					5	7	5										1			86
巻頭	マーク		1	2	2	3		2		1			2													13

ークを使用しているのは2件 (stc.15721、19812) にすぎない。C3は奥付を図柄表示しているので、表示スペースは少しあるが、空き方は様々である。仮にスペースが十分に確保できなければ、巻頭付近にマークを表示することも考えられる。しかしC3も32件中の2件 (stc.504、25479.3) しか巻頭でマークを見かけない。C4形 (12件) は巻末が余白のままであるが、巻頭付近では3件 (stc.12474、12471、23425) のマークしか見かけない。そしてH形は全部で17件だが、巻頭付近にマークを見かけるのはH4形中の2件 (stc.5545、13432) にすぎない。

絵を1回使った場合の使用状況を見てきたので、次に2回使用する場合の内訳を見てみよう。2回使用している表示形はP2 (1件)、P4 (2件)、P6 (2件) と少ないが、使用状況は表 12-2 に示した通りである。

表 12-2：2点の絵の内訳

1	木版+マーク	stc.6894.6 (P4) (1506年)、14079 (P6) (1503年) 17035 (P2) (1520年) (但し、巻頭でも同じ木版を使用)
2	マーク+木版	stc.12380 (P6) (1505年)
3	マーク+マーク	stc.320 (P4) (1516年)

「1」と「2」は表示順序の違いにすぎないが、「1」のstc.17035では同じ木版が巻頭と巻末に使われている。「3」ではマークが巻末の連続ページで使われている。「3」は1例だけなので大げさに言うことはできないが、印刷者マークを宣伝目的で使用するのであれば連続して使用する必要はない。1点だけで十分である。

印刷者マークが多用されていると言っても、全ての本に示されているわけではない。表示スペースのある場合に限られることが多い。これではマークを宣伝目的で使ったというわけにはいかない。マークは自社を宣伝する図柄であるから、本の主題に影響を与えないので、どんな内容の本にも使用可能である。マークは埋め草として理想的な絵といえる。ピンソンも、ド・ウォードと同様に、マークを自社の宣伝より、「ページいっぱいに表示」するための埋め草として使用した事は明らかである。

13. 巻頭付近の白ページ

同じ余白でも、巻頭付近ではどんな現れ方をしているのだろうか。その様子は表 8-1 で「前」と表示した項に示した通りである。この表で使用している X1、Y1 と書いた略号を説明したのが表 13-1 である。なお、巻頭付近に白ページを見かける理由については第 16 項で説明する。

なお、表 13-1 の各表示形がド・ウォードの場合と同じであれば、例図は省略し、異なっている場合だけ示している。

表 13-1：「表 8-1」の説明

		a1 ^a	a1 ^b	a2 ^a	
X	1	本文			
Y	1	扉	本文		
	2	扉 (Incipit title)	本文		
	3	木版	本文		
Z	1	扉	木版	本文	
	2	扉	白頁	本文	
	3	扉 (Incipit title)	木版	本文	
	4	扉 (Incipit title)	白頁	本文	
	5	木版	扉	本文	(未使用)
	6	木版	木版	Paragraph title・本文	(未使用)
	7	木版	白頁	Paragraph title・本文	
	8	白頁	白頁	本文	
	9	白頁	木版	本文	

a1^a : 第1ページ、a1^b : 第2ページ、a2^a : 第3ページ

表 13-1 からわかるように、巻頭付近の表示形には、本文がすぐに始まる X 形、1 白ページのある Y 形、2 白ページのある Z 形の 3 種類がある。

X 形は X1 の 1 種類しかない。本文はページの冒頭から始まり、途中や下部から始まることはない。従って X1 形は常に「ページいっぱいの表示」となっている。

Y 形は本文の始まる前に 1 白ページができる形であり、Y1、Y2、Y3 の 3 種類がある。Y1 と Y2 は白ページに扉や「HERE」扉を示しているの、「ページいっぱいの表示」となっている。Y3 (図 13-1) では白ページに絵 (木版) が示されているので、このページも「ページいっぱいの表示」になっている。Y 形では巻頭の 1 白ページがいずれも「ページいっぱいに表示」されていることが分かる。



図 13-1-1 (stc.15722、1496年) (Y3)

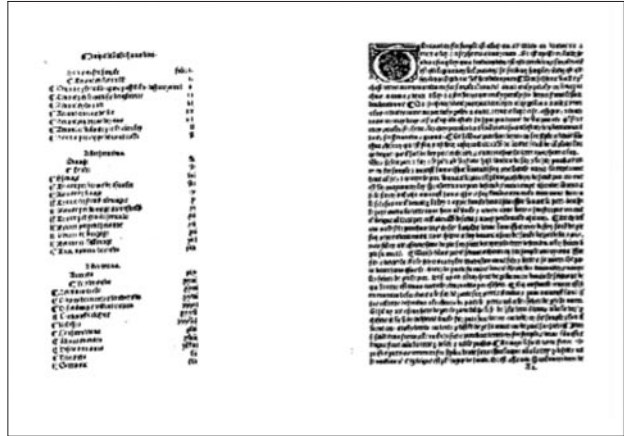


図 13-1-2 (stc.15722、1496年) (Y3)

14. 巻頭の2白ページ (Z形)

3番目は巻頭に2白ページのあるZ形である。これは9種類あるが、ピンソンは7種類 (Z1、Z2、Z3、Z4、Z7、Z8、Z9) しか使用していない。Z1とZ3は2白ページがいずれも扉や絵 (木版) で埋められているので、「ページいっぱい」の表示になっている。それ以外の表示形はいずれも白ページが残っているが、Z2、Z4、Z7では白ページが冒頭ではなく、中間のページに位置し、しかも白ページのままである。

表 14-1: 巻頭付近の表示形の件数

X1	Y1	Y2	Y3	Z1	Z2	Z3	Z4	Z7	Z8	Z9
44	72	11	3	38	52	15	3	4	1	1

巻頭付近で用いられた表示形の使用件数は表 14-1 に示した通りである。表によると、白ページの残る Z2 は 52 件なので、Y1 に次いで多用されている。Z2 は積極的に使用されたとみてよい。冒頭のページは扉ページや絵 (木版) が示されているので、「ページいっぱい」の表示であるし、本文ページも「ページいっぱい」に表示されている。この両者に挟まれたページはたとえ白ページであっても「ページいっぱい」の表示とみなそうとしたのではないだろうか。巻頭付近でも手抜き思想が存在したことになる。この考え方ができれば、使用件数は少ないが Z4 (3 件) も Z7 (4 件) も同じ扱いはできる。

Z8 (1 件) と Z9 (1 件) では最初の白ページは埋められていないが、Z9 だと次の白ページに木版が示されている。他方、Z8 は次のページも白のままである。もっともこの 2 表示形はいずれも 1 件だけなので、例外と見てよいだろう。巻頭付近でも絵や手抜き思想を活用して「ページいっ

ばいの表示」に努めたことが分かる。

15. 巻頭付近の絵

巻頭付近の白ページも「ページいっぱいに表示」されていることは明らかであるが、白ページを埋めるのに使われた絵をさらに別の視点から眺めてみよう。

表 15-1：木版（絵）の重複使用状況

	他の本にも使用	同一本で使用	
図 15-1	25件	8件	(2)
図 15-2	17件	2件	(3)
図 15-3	6件	白	(4)
図 15-4	9件	絵（木版）	(5)

表 8-1 によると、絵付き形は「HERE 形」も合わせると 117 件あり、巻頭付近で使用された絵は 50 種類を越える。その中でも使用件数の多い絵を列挙すると表 15-1 になる。



図 15-1



図 15-2



図 15-3



図 15-4

表 15-1 から分かるように、図 15-1 は 25 点もの本に使われているばかりでなく、この絵を扉ページと次のページに連続使用している本が別に 8 点もある。件数は異なるが、同様の使い方をしているのが図 15-2 である。図 15-3 だと他の本に 6 点、図 15-4 では 9 点に使われている。それに図 15-1 とは別の絵だが、一つの絵を扉ページと次のページに連続して使用する本がさらに 7 点ある⁽⁶⁾。

以上のように、1 つの絵が他の作品に使用されているばかりでなく、時には 1 絵が巻頭付近で連続して使用されている。このような使い方をしていたのでは絵を特定の作品用の飾りと見なす

ことはできない。それに仮に飾るのが目的だとしても、重複して使う理由は思い浮かばない。絵が白ページを埋める目的で使用されたことは明らかである。先にプロマーがやたらに絵を使うド・ウォードを糾弾していたが⁽⁷⁾、同じことはピンソンにも当てはまったことになる。

16. 本全体の白ページ

しかし白ページとは、たとえ絵で埋めたとしても、情報の入っていないページであることに変わりはない。本とは情報を伝える道具であるから、情報を伝えないページがあれば、それは本作りに失敗した証拠でしかない。ピンソンの場合、白ページが巻末付近には表 8-3 によると 182 ページ、巻頭付近には表 14-1 によると 318 ページも存在するので、244 総点数に対して 1 冊あたり 2 ページもの不要なページ（白ページ）が出現していることになる。しかも巻頭から順番に活字組みをしていけば、白ページが巻末に集中し、本作りの不手際がいやでも目に付く。白ページを削除できないのであれば、目立たなくするしかない。それには白ページを 1 カ所に集中させないで、分散するのが最良である。白ページを巻頭と巻末の両方に見かけるのはこうしたわけだったのである。

17. まとめ

ピンソンが木版や印刷者マーク、文字図柄表示、「手抜き表示」を駆使したのは白ページを埋めるためであるが、さらに遡れば「ページいっぱいの表示」思想を遵守しようとした結果にすぎない。しかし条件が厳しいからといって、ピンソンもド・ウォードも白ページや余白を埋めなくて良いとは考えなかった。とすれば彼らにとって「ページいっぱいの表示」思想とは既に確立した表示原則であったことになる。彼らのような当時の二大印刷者がこの思想に従って全てのページを表示していたとなれば、この表示思想は初期の英語本製作者にとって共通のものであったとみなすことができる。しかも白ページを分散化させた結果、巻頭の白ページにも「ページいっぱいの表示」が求められ、本文ページと同等に扱おうとしている。後にこのページが付け足しのページではなく、扉という重要なページに進化することを思うと、この表示思想が本作りに及ぼした影響は計り知れない⁽⁸⁾。

本稿は「平成 22 年度跡見学園女子大学特別研究助成費」による成果である。

注

(1) 高野 彰「白への恐怖・黒へのあこがれ」(3) 『跡見学園女子大学文学部紀要』第 43 号 (2009 年 9 月)

pp.10-18。

- (2) stc. 168, 1833.5, 7566, 11606(2)、11607(2)、13605, 13830, 15396, 15572(2)、15574.5, 15575(2)、15575.5(2)、16112, 16116a.5(2)、16117.5(2)、16121a, 16123(2)、16127, 16899, 23166.5, 23182.3, 23242.5, 23243, 23427a、23940。なお、「(2)」は使用件数が2件の意味である。
- (3) stc. 16112, 23426, 7017, 11612, 11604, 14079(2)、319.3, 23139.5, 11615, 23147, 319.5, 23179, 23179.5, 16127, 320(2)。なお、「(2)」は使用件数が2件の意味である。
- (4) stc. 23954.7, 23955, 23957, 23958, 3277, 14571
- (5) stc. 14862, 6894.5, 4659, 17558, 12413, * (10905, 12549, 17017, 25585)
- (6) stc. 277, 14079, 5088, 5096, 22899, 320, 12380
- (7) 高野 彰「白への恐怖・黒へのあこがれ」(1) 『跡見学園女子大学文学部紀要』第41号(2008年3月) p.63.

Plomer, H.R. *Wynkyn de Worde & his contemporaries from the death of Caxton to 1535*. London, Grafton, 1925. p. 61.

- (8) 巻頭にどんなページがくるのかについて、スミスは巻頭のページが書き始め語(～1473年)、白ページ(1474-89年)、書名(扉)(1490年-)の順に推移するという統計データを提示している(Smith, M.M. *The title-page : its early development, 1460-1510*. London, British Library & Oak Knoll Press, 2000. pp.47-58.)。ピンソンは1490年代に印刷を始めているのでスミスの時代区分に従えば扉の時代に入るが、この3種類のページ表示形をまだ混在して使用している。イギリスの扉史はヨーロッパより遅れていることがわかる。

	1504	1505	1506	1508	1509	1510	1511	1512	1513	1514	1515	1516	1517	1518
前	E P23854 Z1 C1	3133 E	Z2 C3	D16175E Z1 P3										
後	E P23855 Z1 C1	17359	Z2 G4	16140E Z1 P1										
前		13432 E	Y1 H4											
後		Z34278 E	Y1 G4											
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														
前														
後														

